震度 7 の体験（1995 年 3 月号掲載・杉浦　達雄）

震災当日は公休で自宅で読書していた。震度 7 の烈震が襲った時、幸運にも眠りが浅かったので、咄嗟に掛布団を頭のほうにたぐり寄せることができ、ガラスの破片を浴る事はなかった。しかしこの縦揺れの凄さから、家は壊れたと感じた。

出勤のため徒歩で東に向かった。家の倒壊で通れない道路が多く、山陽電鉄の軌道沿いに歩いた。風は東風で中央幹線の両側で火の手が数ヶ所上がっており、神戸消防の現有力では、能力を超える状態になってしまったと思った。

長田消防署に到着し、長田 13 の隊員として、新湊川で揚水し、長田 2 に中継した。国道 2 号線の山側を、西方向に向かってホース延長し、放水中も、延焼範囲は広く無力感を感じた。この 3 月に退職する者として昭和 42 年の集中豪雨災害以来の天災は、この神戸にはないと思っていた。以前に震度 5 の地震は経験したことはあったが、地震のため生活設計までつぶしてしまうとは夢にも思ったことはなかった。